

創立150周年 記念特集

青山学院の創立150周年を迎えるにあたり、
学内外の皆さんに、創立150周年を記念して、
特別にメッセージを寄稿していただきました。

院長 山本 与志春

「地の塩、世の光」 サーバント・リーダーとして生きる

1874年、米国のメソジスト監督教会女性海外伝道局が日本に派遣した23歳の女性宣教師、ドーラ・E・スクーンメーカーは、日本到着からわずか3週間後に青山学院の最も古い源流である「女子小学校」を開設しました。「女子小学校」といっても、生徒は男子2人を含む7人のみ。教室は津田仙の隣家の一部屋であり、校舎も教科書も黒板もノートもない状況でした。それは学校というよりも、津田仙の家族や親戚知人を集めた私塾のようなものでした。しかし、ドーラ自身が言うように、その小さな学校は「暗きところに灯された小さき光」でした。

しかし、その小さな光は、ジュリアス・ソーパー宣教師やロバート・S・マクレイ宣教師が開設した「耕教学舎」や「美會神学校」と合流し、150年を経た今では幼稚園児から大学・大学院生まで約24,000人が学ぶ総合学園へと成長しました。スクーンメーカー宣教師は、学校に必要な設備がほとんどない中で、数人の生徒とキリスト教信仰を伝えたいという熱い祈り、そして持てる力を生徒に全て捧げる揺るがぬ決意だけを持って始めました。それは、イエス・キリストがレプトン銅貨2枚を捧げた貧しい女性を称えたように、額の



多寡ではなく捧げる心を顧みてくださるという信仰に基づくものでした。そして、少年が捧げた2匹の魚と5つのパンで5,000人の空腹を満たした奇跡のように、わずかな捧げ物でも神の祝福により大きな実を結ぶことができるという信仰でした。

7人で始まったこの小さな学校が、今日の青山学院に至るまで成長したのは、スクーンメーカー、ソーパー、マクレイの3人の宣教師をはじめ、多くの先達の献身的な奉仕のおかげです。彼らは命がけで日本に渡りました。青山の土地購入資金や校舎建設費などを多額の寄付で支援したジョン・F・ガウチャーは、校舎に自分の名前を付けることを断り、世界各地で援助活動を続け、自らの資産を子どもたちに残すことを選びませんでした。米山梅吉・初夫妻は、一汁一菜の質素な生活を守りつつ、緑岡幼稚園と緑岡小学校の開設に私財を投じました。また、勝田銀次郎や万代順四郎は、校舎建設や奨学金制度の創設に私財を惜しみなく捧げ、それを喜びとしました。

さらに、津田仙と本多庸一は、3人の宣教師を助け、草創期の青山学院に重要な役割を果たしました。二人は、青山学院やキリスト教発展のために死ぬ間際まで働き続けました。これらの方々は、青山学院のスクールモットー「地の塩、世の光」を体現するサーバント・リーダーとしての生き方を示しておられます。

青山学院の創立150周年を迎え、私たちはこの学院の歴史と使命を改めて見つめ直す機会を得ています。青山学院は、創立以来150年にわたり、建学の精神であるキリスト教信仰に基づく教育を目指し続けています。その目的は、単なる知識の提供にとどまらず、すべての人々と社会に対する責任を進んで果たす「地の塩、世の光」として生きるサーバント・リーダーを育てることです。それは、差別や迫害がなく、誰もが安心して暮らせる、武力によらない本当の平和な世界を作り出す人を育てることに他なりません。それこそが、青山学院の使命です。

この節目の年に、私たち一人ひとりが「地の塩、世の光」として、サーバント・リーダーとしてどのように生き、何を目指していくのかを考え、新たな一歩を踏み出していきたくと願います。

学院宣教師 REEDY, David W

青山愛、日本愛 (引退宣教師の思い出)

私の父 Boyd Ray Reedy は青山学院及び日本を愛していました。2024年の6月10日に天国に旅立った150周年の年のクリスマス号では父の「青山愛、日本愛」をご紹介します。

Boyd Reedy は1927年アメリカのテキサス州で David Watkins Reedy の長男として生まれました。(数十年後、息子に同じ名前を命名します)そして18歳の1945年の戦争終了後の占領軍として初めて来日しました。焼け野原の日本を目の当たりにして悲しみを憶えると共に、その時に会った日本人との触れ合いを忘れられず、いつかこの国に戻ってくることを決意しました。アメリカに戻ってからは大学を卒業し、宣教師として日本に戻ることを決意し、大学院を卒業したのち合同メソジスト教会から日本へ派遣が決まりました。

再び日本に訪れた際には三軒茶屋のアパートに John Krummel 先生 (元青山学院宣教師) と生活をしながら日本語学校で一定の日本語力をつけるために勉強を始めました。

そして1956年に青山学院で宣教師生活が始まることになりました。当初は父が大学で Krummel 先生が高等部で教鞭を取る予定でしたが、Krummel 先生が大学の配置を希望し、父は高校の方が生徒と接する機会が多いと思ったようで二人の宣教師の配置換えがありました。そして若いクリスチャンの集まりで出会った田中実子 (後に青山学院宣教師 Reedy 実子) と1964年に当時の青山キャンパス内の礼拝堂で結婚式を挙げ、それから1992年までの36年間高等部で、そして学院宣教師として色々な経験をさせていただきました。そして1992年のカリフォルニア州にある引退



贈答された金木犀の苗



Boyd Ray Reedy 宣教師

した宣教師のコミュニティで生活をしておりました。引退後も何度か日本を訪れましたが、その度にカキフライ、肉そば、うなぎは必ず食べていました。また、亡くなる直前まで高等部での話はいつもしていました。初めて修学旅行に行った時、ホームルームを持ちたかった話、入試作業の話、理事会での話など話しだすと止まらないほど青山学院の話をするのが好きでした。

父は役員として理事を1985年から1994年まで3期、そして評議員は1969年から1977年、そして1985年から1994年まで9期、2007年に来日した際に名誉理事の称号を12月の学院クリスマス礼拝の場で与えられました。

最後に：高等部時代、毎年9月から10月に高等部門を通るたびに香っていた金木犀の香りが忘れられなかった父は2年ほど前に金木犀の苗を贈答しました。大学側から高等部の入り口の左手前にありますのでお時間がある時に金木犀の香りが感じられる秋にお立ち寄りください。

日本聾話学校教員 飛田 貴基 (校友)

地の塩・世の光として

青山学院での18年間を考える時、仲間との青春の記憶と共に、日々の礼拝、そして日常の様々な所にあった祈りが思い出されます。幼稚園から大学まで、一貫して私を支えてくれたものはこの祈りであり、《必ず誰かがいてくれる、誰かが覚えていてくれる、誰かが祈っていてくれる》という安心感と、《そしてあなたもまた、その誰かになることができる》という励ましだったと感じています。

特に、先生方に祈っていただいた記憶は多く、幼い頃に友達とケンカをした時、先生が二人の手をとって祈って下さったこと、そしてまた暴れん坊だった私を抱き締めながら一緒に祈ってくれたこと。高等部に入ってからも、悩み苦しんだときに家に電話をくださり祈りの言葉をかけてくださった先生がいたこと。例を挙げれば枚挙に暇がありません。こうして思い返しても、何とも多くの先生方にご心配とご迷惑をおかけしてきたものと反省し、そして感謝をしているところです。昨年末の事になりますが、幼稚園でお世話になった先生に同級生と一緒にお会いする機会を得ました。その際にも先生が「みんなのためにお祈りしてもいい？」と変わらぬ優しい声をかけてくださり、祈っていただきました。久しぶりに聞く先生の力強くも暖かい





祈りの声に私たちは少し涙ぐみながら、こうして青山学院で育ってきたのだと再確認ができたものです。

私は現在、日本聾話学校という学校で教員をしています。聴覚に障がいのある子どもたちのための、小さな小さな学校です。日本聾話学校もまた、神様によって建てられた学校であり、私も生徒と共に祈りつつ過ごしています。たくさんの方々には祈られながら創立104年目を迎え、青山学院の皆様からも幼稚園から大学まで本当に多くの方々にお支えをいただいています。昨年11月、私は初等部の礼拝で日本聾話学校のことを話す機会をいただきました。また、この10月には中等部の生徒35名が来校して交流し、生徒同士が礼拝の中で共に祈る「祈りの輪礼拝」を行いました。こうして今もまだ、祈りを通して青山学院と繋がる事が出来ていることに感謝します。

社会に出てからこそ、地の塩・世の光としてどのように生きていくかが問われます。大学を卒業して14年、まだまだ答えは出ませんが、今も昔も、たくさんの方々の祈りの中にいることに感謝し、これから先の人生も自分自身に問いかけていきたいと思っています。

青山学院創立150周年、心からお祝い申し上げます。